岐阜大学附属図書館報　ISSN 0915－8960

寸　胴

THE GIFU UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN　第10号　1993. 6

目　次

この三年間を振り返って思うことなど（大谷　勲）… 1
季節の旅人について，想うこと（中村孝雄）…… 3
館蔵資料紹介
　支考筆『訃音』（母利司朗）…… 4
教官推薦図書
　情熱がすべて（正村静子）…… 6
　人を理解するって？（森田敏子）…… 6
グラフで見る附属図書館統計 …… 7
平成４年度基本図書購入リスト …… 9
教官寄贈図書 …… 9
図書館関係委員会など …… 9
図書館員から一言　森　一雄 …… 10
　　村上喜廣 …… 10
お知らせ …… 10

この三年間を振り返って思うことなど

大　谷　　勲

この館報「寸胴」の創刊号に館長として発刊の喜びを述べさせて頂き，今またその10号に寄稿の機会を与えられましたことは身に余る光栄です。医学部から選出の附属図書館委員から横滑りの形で第22代館長に選任されて以後，曲がりなりにも３年間の任期を全うできましたことを全学の各位への感謝の意に替えまして，ここに当時のことを回顧して参考に供させて頂きます。

まず，図書館運営経費についてである。国立大学の学生・教官当積算校費はここ10年来まさに微増のままに据え置かれ，図書館経費についても同様であった。このような環境下で，本省積算が20～30％に過ぎない図書館運営経費の見直しは至難のことと思われた。しかし，それはご負担頂く各学部の利用者に結局は還元されるとの認識に立って，当時の中村槇吾事務長の尽力もあり，数％の増額をお願いすることとなった。一委員として委員会に出席した折には学部負担増とならないよう削減の方向で意見を述べていたのであるから180度の方向転換であり，立場が変るとこうもなるかと複雑な感慨に囚われたりもした。新館長への祝儀とも感じられる各学部のご配慮で提案を認めて頂けたのであるが，実はこれには池上八郎前館長のご配慮が先行していたのである。つまり，前館長によって，前年度のうちに次年度の予算案骨子を検討し，４月の委員交替をはさんで，新年度にスムースに予算案が作成されるようにとのレールが敷かれていたからである。

この数％にはこの館報発行の経費も含まれていたのであるが，その発行要領についても委員会での検討を終えて，平成２年６月に創刊された。就任後，実に８か月を費したことになる。その時には河田幸男事務長に配置換になっていた。

平成３年10月，部局長懇談会の席で，学内ミニＬＡＮが話題に上った。それには各位のご尽力でようやく本図書館にも，従来より情報処理センターにお世話になっていたところ，専用の電算機が導入される見通しがあったことにも関連しての構想であり，これが通信速度のネックを解消するため，情報処理センターと附属図書館とを光ファイバーで実験的に接続する運びにつながったかとうれしく思われる。

また12月には，従来はブックディテクションのみであったのが，新たに入退館管理システムが導入された。これは，例えば土曜日の利用者，利用状況の把握等に早速資料を提出してくれることとなった。

この年の秋，図書館員有志の奥飛騨河合村（天生峠）への探訪によって懇親が深められ有意義であった。

平成４年２月，専用電算機開通式を細やかにかつ感激深く行った。その夜の酒肴は各館員が持ち寄った手造りの品々であった。４月には溝口敏博現事務長に配置換となり，その秋の奥美濃美山町深訪の旅も印象深いものがあった。

３名の歴代事務長のもと，最終の図書館委員会で，名誉教授・退官教官室の移転（これは現有図書館の諸施設を大きな手直しをしないで有効利用ができないものかと考えてきたものの一つ），新聞閲覧台の設置（外国人留学生の増加を配慮して），そしてこれは図書館員に多大な負担をかけ，しかし，いつかはしなければならない，不用図書廃棄の決定などに賛同を得て任期を終えた。

この回想も終わりに近づいたが，ここに付言しておきたいことがある。それは週休二日制のもとで，大学図書館はどうあるべきかの議論である。任期終了の間際にこれに遭遇した。文部省はかねてより三ない主義（人は増やせない，金は出せない，しかしサービスは低下させない）で，図書館機能を維持できないかということであった。欧米で研究生活を送られた方のうちには，24時間開館を期待され，医学部分館でその要望を受けたこともあった。しかし，現行の勤務体制では図書館員にのみ犠牲的精神を期待しての教育・研究の推進ということであり，これでは要求のみで問題の解決にはならない。それでも開館をというのであれば，光熱費は別として人の問題については打開策がある。それは，受益者負担の原則とまでは言わないまでも，600名を超える本学教官が交替で土曜さらには日曜日の開館業務に当ったならば，年間どれだけの負担であろう。土曜か日曜日の１日を終日，年に１～２回開館業務の傍ら，図書館でゆっくりと時を費やすのも却って楽しいのではなかろうか。

自らが開館業務に資することを欲しないならば，いま一つの方策がある。それは教官の研究者としての考え方の切り替えである。土曜日はもちろん日曜日も研究するのは個人の自由であり望ましいことであるかもしれない。しかし，図書館を利用しての研究は月曜から金曜日までとする研究体制を自己の生活環境に習慣付けて了うのである。

これによって計画的に研究がなされたならば，自分の研究のプライオリティーに遅れを取るようなことはまずないであろう。したがって土曜休講が確立した時点では大学図書館は土曜日も閉館にすべきではないかとの考え方である。

幸い，本学図書館員の専門職としての意識は高く，その立場から土曜開館に強く異を唱える者とておらず，激論を戦かわすこともなく公務員週休二日制が施行されても閉館とはならず，安堵の胸を撫で下ろした。

この３年間に空しく感じたこともある。それは私の任期期間中だけでも図書館のサービスはCD－ROMによる検索の一つを取り上げても，その他多方面で向上したはずである。利用者の多くはこれらを当然のこととして受け止めているようであるが，実施に当っては図書館員が時には夜を徹して何度も検討会を開き，先発大学に足を運んでその結果，ようやく実現したものである。館長への配慮は全く無用であるが，利用者の立場から逆転の立場を経験した実感として，もし利用者の感謝の気持の一端が図書館担当員に直接表明されれば，それこそが当人にとって次のエネルギーの源となることを強調したい。そして温かな配慮によって大学図書館の運営に一臂の力を貸して頂くよう願って止まない。

（おおや　いさお：前附属図書館長）

情報検索サービス（NACSIS－IR）からのILL申込機能の運用のご案内について

学術情報センターの情報検索サービス（NACSIS－IR）を利用中の研究者が必要な文献を検索した時，図書館に出向くことなく，その場で文献複写等の申込みが所属の図書館にできるILL申込機能の運用が開始になりました。

ILL申込機能を利用する場合は，ILL申込機能の利用申請をする必要がありますので，利用される方は参考調査係（内線2613）又は分館図書係（内線2325）までご連絡ください。

季節の旅人について，想うこと

中　村　孝　雄

昨年11月，久しぶりに本格的なバードウオッチングの機会に恵まれた。千葉県の我孫子で行なわれた研究会の合間をぬって，手賀沼に出かけた。手賀沼は今風にいうとリゾート地のはしりともいうべき処で，武者小路実篤や志賀直哉らが寓を構えたことで知られ，その湖畔には山階鳥類研究所や鳥の博物館などがあり，水鳥の飛来地としても知られているところである。

早朝から，それ相当の出で立ちで2時間ばかりウオッチングを楽しんだが，その間に私のメモ帳にはカワセミ，アオサギ，オナガガモなど20種類ばかりの鳥の名前が記されていた。しかし会場に帰ってから，同行者と互いにメモ帳を突き合せてみたら実に31種類にもなった。その中には決してヒトに近ずこうとしない赤い鉢巻きをしたバン，ヒトなつっこくてポテトチップスの大好きな白い額のオオバンなど，懐かしい鳥も観察されていたのである。この柳戸キャンパスのバンの池の主は今どこにいってしまったのだろうか？

今年も桜前線に追われるように北上してきたツバメを先頭に，オオヨシキリ，ブッポウソウ，ホトトギスなどの夏鳥たちは，今盛んにヒナを育てているが，9月にもなると徐々に姿を消し，10月末までにはほぼ渡りを終える。これと入れ替わりにガン，コガモ，ツグミなどの冬鳥たちが北国から渡来してくる。11月末から12月にかけてはオオハクチョウなどの姿も観ることができる。更に，シギ，チドリなどのようにシベリアなどで繁殖し，冬を東南アジアをはじめ，遠くのオーストラリア方面で過ごし，日本には春と秋に立ち寄ったり，通過するだけの旅鳥がいる。ここまでを渡り鳥と呼び，繁殖地と越冬地を正確に往復する。この他にスズメやカラスのような留鳥，ウグイスやモズのような漂鳥がいるが，留鳥の中にも日本列島を北から南まで，かなり移動するものもおり，又同じ種の中でもコサギやゴイサギのように渡るものと渡らないものがいて，その区別はなかなか難しい。

鳥の渡りについて有力なものとして，春の渡りは繁殖地への愛着心からであり，また秋は寒さと飢えから逃れるためであろうとされている。それにしても，そのスケールの大きさ，翔破距離，群れに加わる個体の数，飛行高度などの点で我々を驚かせる。夏鳥では東南アジア方面から琉球列島を経て九州南部に至り，分散するか，さらに北上して日本海沿岸に沿って渡る。冬鳥はシベリア方面からカムチャッカやサハリンを経て南下するものや，日本海を横断するものなどがある。旅鳥はシベリア大陸から冬鳥とほぼ同じコースで北海道から本州に入り，東南アジア諸国に渡る。シギ，チドリの仲間には遠くオーストラリアやニュージーランドに到達するものもいる。

鳥の渡りに関する知見は近年大幅に進んだ。しかし好奇心の強い科学者たちを熱中させるような問題が未だ未解決のまま残されている。ある種の鳥が長途の渡り飛行に際して，どこを通って，どう飛んだという正確な地図が描けるようになれば，渡りの時期や方位の決め方に影響する諸因子がわかるかも知れない。コウモリも数百キロの渡りをするが，視力が極めて弱いから天測航法などまず無理なことである。コウモリは障害物を避けたり，虫を捕獲したりするために超音波の信号を利用する。しかし彼らの発する超音波は，空気中を100メートル進むあいだにほとんど吸収されてしまうから，長距離飛行の方向を決めるのには適していない。それを直接に知る実験法を考え出さないかぎり，空想の領域の外に出ないのである。さらに重要なのは若鳥がもっている夜空の星の分布にもとずいて，ある方位を選定する遺伝的能力を詳しく分析することである。鳥が生まれながらにそういう能力を持っているということは驚くべき発見であった。その真偽について詳しく検討するためには，遺伝学者や生化学者の手を煩わさなければならない。

鳥の渡りといったような一つの事象に関して，我々が本質的な理解を深めるのは，ほとんど例外なく，意外な結果を含んでいる発見，それは全く意想外な発見がなされた場合である。将来の進歩も意外なかたちで現われるだろう。科学の進歩が予想できるものだとしたら，それは一種の技術になってしまう。そうなったら科学は多分有用ではあるが，魅力の大部分を失うのではないだろうか。

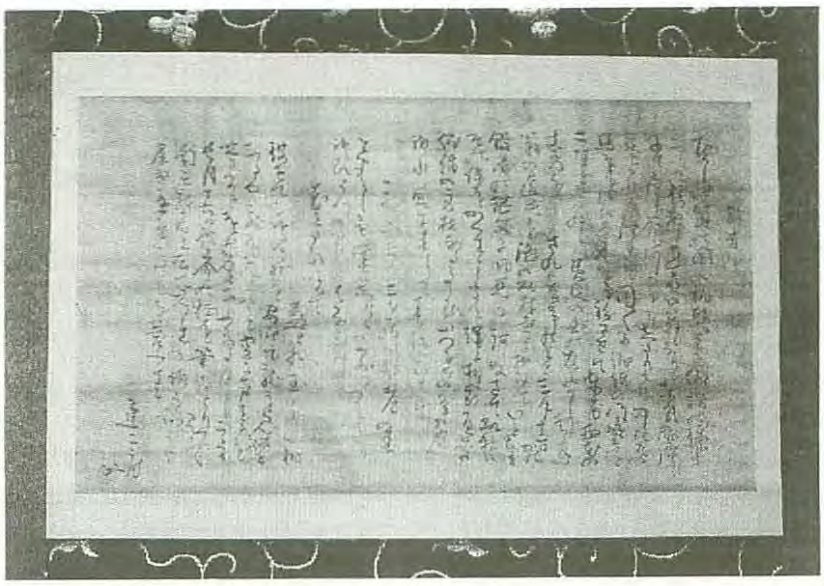
（なかむら　たかお：農学部教授）

【参考書】鳥類の生活（紀伊国屋書店）
鳥の生態と進化（思索社）
環境と内分泌（東大出版）

館蔵資料紹介

支考筆『訃音』

母利司朗



訃音

むかし伊賀の国の桃地堂に俳諧の棟梁ありて、樗散に盧応の翁となりて、東武の深川にて手斧はじめをぞしたりける。中比その巻がねをつたへて国々に俳諧の門をたてて、馬をもつながせ、犬をもねさせて、東花西花の二坊とよばれしは、美濃の国のなにがし獅子庵の支考なりける。されば去年の春三月十二日、かの翁の忌を洛の双林寺におゐていとなみ、仮名の謎文に師恩を謝しぬ。さて此秋はその跡をかくすと聞に、誠におしむべきは俳諧の良材なる事を。いづれの年ならん、我北国に来りて春をむかへて、

龍宮に三日居たれば老の春

と聞えしが、その春はしばらくの別にのぞみて我ひとつの箱をはなむけす。

花みたび咲て蓋とれ玉手箱

彼すでにその箱をあけて、龍かと見て龍となるや。龍かと見よやと空に声するを、世にまたその名とはいふなるべし。ここに長月十六日、彼が斧の柄を筆にとりて、見よ見よ、南無龍居士去ていづれの術をか得たると虚空をたたけども答へず。

蓮二房　花押

ここに紹介する資料は，本学附属図書館所属にかかる美濃派（蕉門俳諧の一流）の祖支考の自筆懐紙（寸法縦25·1，横41·4糎）で，「訃音」と題される一文である。いかにも古色然とした軸物に表装されており，裏書から，おそくとも安田以哉坊（以哉派祖）の頃には現在見るかたちをとっていたらしいことがわかる。昭和11年，まず岐阜県師範学校（現教育学部）の企画収集する「郷土研究資料」の一点として収められたが，戦後，学制改革に伴う管理換によって岐阜大学附属図書館に移された。なお本館蔵の和本古典籍類については，近年，文部省国文学研究資料館の手で調査・撮影が行われ，昭和58年から同館において研究者を対象とした閲覧・写真複製のサービスが行われており，比較的容易に利用することができるようになっている。

さて，本資料「訃音」は蓮二房なるものが支考の逝去を告げたかたちをとっているが，これが例の正徳元（1711）年八月十六日の支考佯死に関わるものであることはあきらかであろう。これと同じ内容のものは，正徳元年冬頃には刊行されたと推定される『阿誰話（たそのわ）』にも収められている。同書はその支考佯死にたいする追善集として編まれたもので，郷里北野の門人渡辺狂の撰に託して，(1)支考自身の草した長文の「終焉記」（後に『本朝文鑑』所収），(2)白狂・右範以下北野連衆六吟追善歌仙，(3)万子の追善文と万子・秋口・北枝・八紫の金沢連衆四吟歌仙，(4)他二歌仙，および(5)吾仲の支考追善文および句か

らなっている。そのうちの(3)万子他四吟歌仙の前に置かれる無記名追善文が，本資料と同じ内容なのである。『阿誰話』所収文との間には，漢字・かなの違い，てには等の他ほとんど異同はみられないが，『阿誰話』で，文中「水国に」「死別に」となっていて意味の判別しにくかった箇所が，それぞれ「北国に」「別に」の形であったことがわかり，はじめて正確な文意をつかむことができるようになった。

『阿誰話』を素直に読むかぎり，この一文の執筆者は歌仙の発句作者万子とよみとれる。万子は加賀藩士生駒重信の俳号で，金沢蕉門の重鎮北枝に近い当時支考と親しかった実在の人物である。文中，「我北国に来りて」と支考の来訪を伝える点からも，加賀の万子の文とするにふさわしい。よって，文中の「花三度咲きて蓋とれ玉手箱」の句は，例の『蕉門元禄句集』にも万子の句として載せられているわけであった。ところが本資料では，その作者が万子ではなく蓮二房の名となっているのである。これはどう考えたらよいことであろうか。

この蓮二房とは，支考佯死の直前正徳元年八月十四日付野航・右範宛書簡，あるいは後に述べる『山中三笑』あたりから見え出す，北野門人に託した支考の変名であるが，問題は本資料の執筆年時である。もしこの懐紙がほとんど同文を収める『阿誰話』の刊行以後に書かれたものであるとすれば，万子作の形をとっていた追善文をわざわざ蓮二房名で染筆したことになり不自然である。では，これを逆に『阿誰話』成立に関わる草稿的資料と仮定し；『阿誰話』刊行以前に染筆されたとした場合はどうであろう。

ここで，変名白狂の名で出した支考追善集『阿誰話』におさめられる支考自作「終焉記」の，佯死日付を見てみよう。

今年は宝永辛卯の秋……此日は八月十六日也。

この宝永辛卯は八年にあたる。しかし，宝永八（1711）年は四月二十五日に正徳と改元され，宝永八年の秋はない。とすれば，支考自ら著わしたという「終焉記」は，すくなくとも宝永八年四月二十五日以前にすでに書かれていたものということになるはずである。佯死の発案は少なくともそれ以前でなければなるまい。ここで気にかかるのは，その前年三月，東山双林寺におけるはなばなしい芭蕉翁十七回忌追善を興行した後，九月に越前連衆らと加賀の山中におもむいたおりの歌仙における，

仏の経にはや死ぬとあり　　伯兎
十六夜の影はきのふの残念か　　作嚢
（「濁酒」　伯兎・蓮二房（支考）他五吟歌仙）

という付合である。作嚢の句は，前句の「仏……死ぬ」から釈迦入滅の二月十五日，つまり「十六夜の……きのふ」を導いたものではあろう。しかし，「十六夜」の語は，連句一巻の中では名月としての八月の「十六夜の月」をこそ意味していたはずであり，とすればそれは，支考の佯死予定（？）の八月十六日をあてこんだものと理解できるのではなかろうか。もしこの憶測が成り立つとすれば，支考の佯死計画は，その前年秋の加賀山中におけるくつろいだ談笑の中で思い付かれた一種の座興であった可能性が高いのである。

以下，想像に想像を重ねながら，その佯死計画の進行を連ねてみよう。佯死の発案は，郷里北野の連衆，越前・加賀，京都の吾仲一派の連携のもと具体化され，翌年三月，架空の門人「渡辺狂（＝白狂）」が『東山墨直し』に登場し，佯死後の変名が確定する。以後，支考は長文の「終焉記」と二・三の追善文を著し，それを万子および吾仲に示し了解を取り，それぞれの作としてすべてがお膳立てされた上で，万子・北枝・従吾・吾仲らの連句ももたらされ，支考自草の追善文と組み合わせ『阿誰話』として刊行された……。本資料は，刊本『阿誰話』のなかに万子の一文として仮託される以前の「蓮二房」名になる支考自作自演の追善文そのものであった，とみることができるのではなかろうか。

考えてみれば，「宝永辛卯の秋…八月十六日」というぼろはご愛嬌だとしても，あの長文の「終焉記」を一目見たもののうち，一体なにほどの者が，それをまともに支考の逝去そのものと受け止ったのであろうか。支考自身，もしこれをもって深刻な意図を勘繰られたりすれば，それこそ迷惑せんばんであったろう。後年，支考の三回忌にあたって編まれた『其日歌仙』に，百阿弥は次のような一文を寄せている。

つらつら三頻の像前に坐して往時を思ふに，それ黄山の老人東花坊の亡名は正徳辛卯の秋にして八月既望の影にいざよひけるとかや。其頃は『阿誰話』の沙汰ありて，諸国の風人にその話をぬけよとその時の変化を示す。その後，自ら終焉の記を著して衆人に名残を惜しむも生涯の洒落とはいふなるべし。

『阿誰話』は，厳密には「支考」名の終焉という意味合いでとらえるべきなのであろう。つまりは，門人「蓮二房」「白狂」に身を置きかえるかたちをとった改号披露というべきであり，ただそれが支考一生一代の「洒落」であったところがみそというべきであろうか。本学附属図書館蔵の「訃音」は，正徳元（1711）年八月十六日の支考佯死一件の楽屋裏を垣間見せる貴重な証人なのである。

（もり　しろう：教育学部助教授）

教官推薦図書

教官から，その専門分野を専攻しようとする学生に先ず薦めたい入門書・基本図書，あるいは，より多くの教官・学生に教養書として是非一読を薦めたい図書を紹介していただいています。

情熱がすべて（シュテファン・ツヴァイクの世界）

正　村　静　子

学生時代に必修ということで初めてドイツ語を習い，その文法に苦労したが，読本の教材に選ばれたオーストリーの作家シュテファン・ツヴァイクの短編“Turmbau”には深い感銘を受けた。バベルの塔以来の優れた記念塔を建てようと若い天才的建築家を招き，自宅に泊めた市長の娘と建築家の悲劇的な恋愛が描かれていた。処女性について問い掛けたこの作品は19才の女子大生にとって強烈であった。

それ以来この作家の作品を漁るようになり，もっぱら日本語訳されたものを読んだ※。そして訳者によるあとがきで彼が，私の生まれた1942年には「私の精神の故国ヨーロッパは今や自滅した」という遺書を残して亡命先のブラジルで自殺していたということを，そして，昔の学生が必ず読んだロマン・ロランの長編“ジャン・クリストフ”の「曙」の巻にツヴァイクも強く引きつけられたということを知り一層親しみを覚えた。

“アモク”，“女の24時間”，“燃える秘密”，“チェスの話”，“心の焦燥”，“見知らぬ女からの手紙”。これらは小説である。何かに－それは恋愛であったりチェスであったり美しい蝶であったりした－惹かれて没頭し，時にはそのまま自滅してしまうという激しい情熱の世界は学生時代の幼い人生観を揺さぶった。

“昨日の世界”，“マリー・アントワネット”，“メリー・スチュアート”，“マゼラン”，“人類の星の時間”といった伝記・歴史小説の領域でもツヴァイクは光を放っていて，それらに出てくるロマンチックな場面はツヴァイクならではの激しさと優しさとに満ちている。ツヴァイクが兄のように敬愛したロマン・ロラン，父のような友であったというフロイトとの深い交友（フロイトの葬式に弔辞を読んだのはツヴァイクであったという）は彼の作風に強い影響を与えた。

「友情がツヴァイクにとっては宗教である」とロマンが言ったツヴァイクの世界は若い人々に薦めたいというよりもむしろ自分自身が再びその世界に浸りたいというべきかもしれない。たいそう読書の時間が減ったこの頃である。

（しょうむら　しずこ：医学部教授）

※ツヴァイク全集　みすず書房

人を理解するって？

森　田　敏　子

看護を行うには，看護の対象である人を理解することが必然的に要求されます。「人を理解する」といっても人間ほど複雑で分からない存在はないのですから，これは容易なことではありません。この「人の理解」を助けてくれるのが多くの本でしょう。ここでは3冊を紹介しましょう。

まず，事故で四肢が麻痺した青年が口で絵と詩を書くようになるまでの生命の軌跡を描いた闘病記を選びました。星野富弘さんの『愛，深き淵より』立風書房です。主人公の障害との闘いと葛藤から，やがて詩画に起死回生の道を見いだす精神史です。随所に折り込まれている詩と絵がこんなにも深く人間の命の尊厳と結びつくのかと感動を覚えずにはいられません。

次は，ドルトン・トランボ著『ジョニーは戦場へ行った』（信太秀夫訳　角川文庫）です。主人公ジョニーは戦場で負傷し，目，鼻，口，耳を失い，しかも両腕，両脚を切断されて，ただベットの上に置かれているだけの状態になっています。誰からも植物人間と思われて人間扱いしてもらえません。そのジョニーの胸に，ある看護婦がゆっくりと「MERRY CHRISTMAS」と指で描きます。このことからジョニーはこの日がクリスマスであることを知り，感動します。患者が自分の意思を表現できなくなった時に，正常な理解力まで失われてしまったと誤って判断し，人間性を無視した看護をする危険性から避けてくれる一冊になることでしょう。

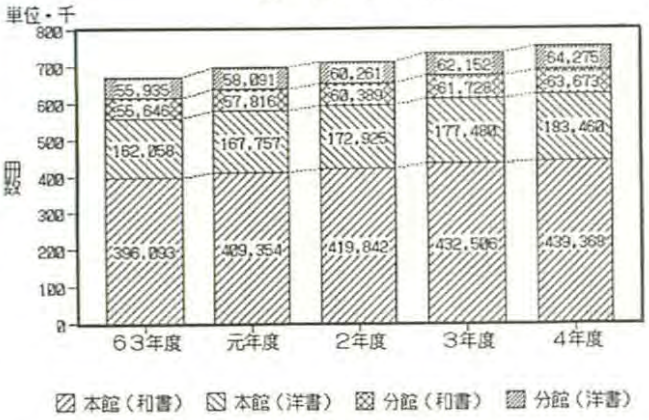
最後に紹介する本は，「何のための知識！シリーズ」（風人社）の中から，『手は何のためにあるか』です。看護する時の技術は，まさに「手」を通して行います。手の思想，手の医学，手の進化，「手」は心の窓，手による認識などといった内容から，「手」の果たす役割と意義を考えさせられます。改めて「手」の魅力を知り，「手」を見直す機会になることでしょう。

以上の3冊は，看護がめざす，「健康な人間像」を理解する上でも役立つと思います。

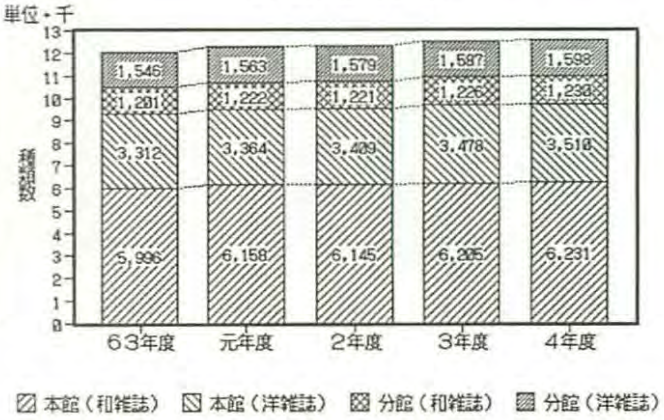
（もりた　としこ：医療技術短期大学部助教授）

グラフで見る附属図書館統計

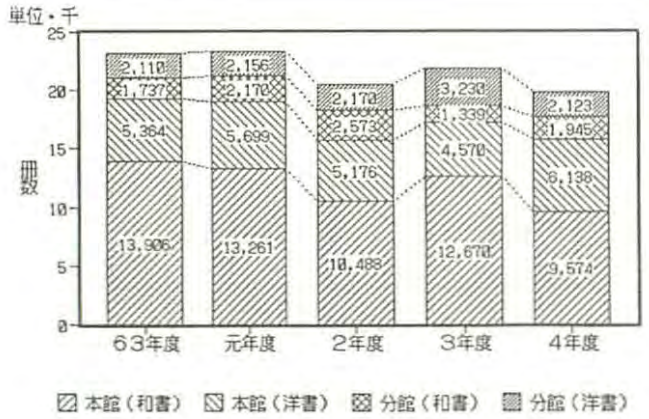
蔵書冊数



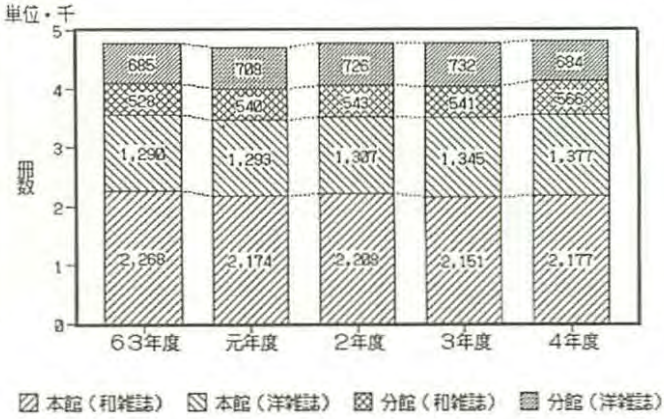
雑誌種類数



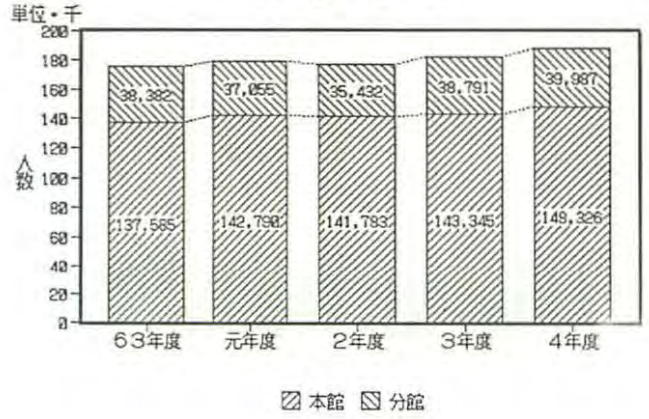
年間図書受入冊数



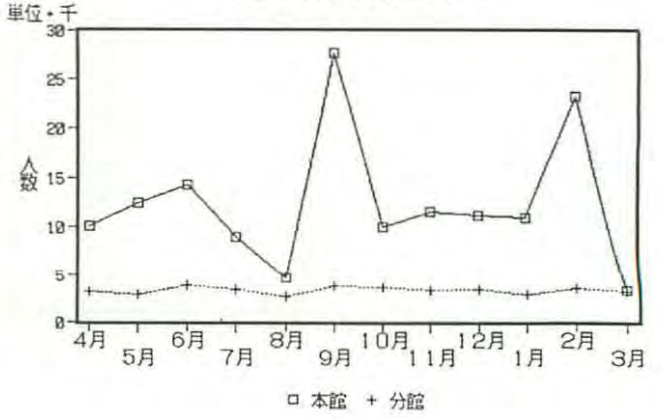
年間雑誌受入種類数

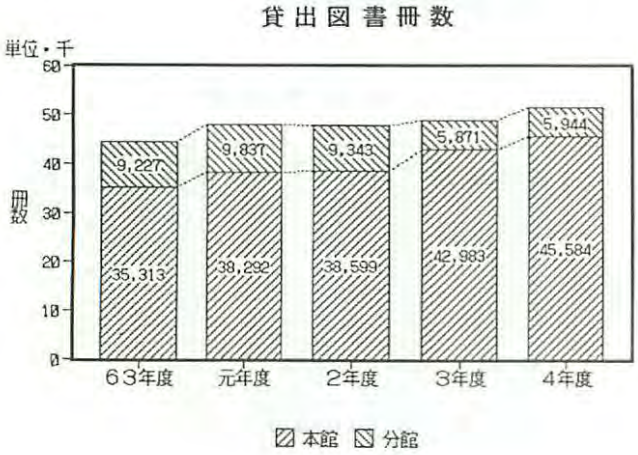


入館者数

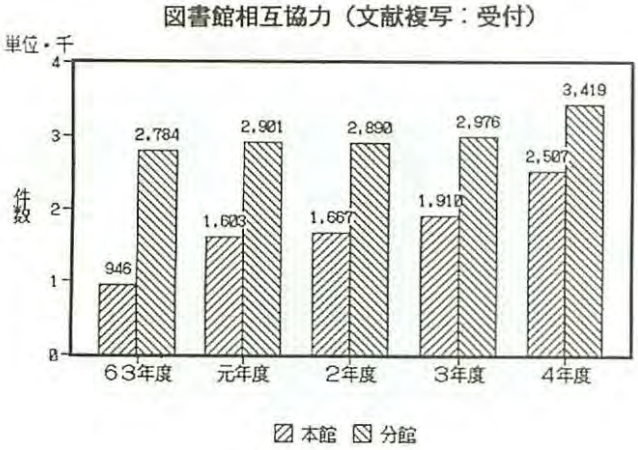


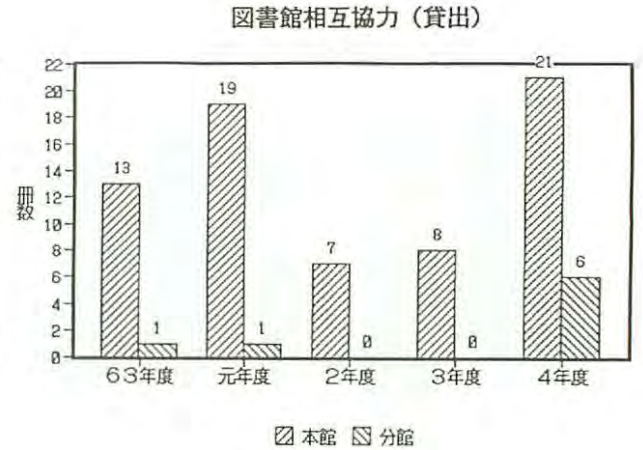
平成4年度月別入館者数

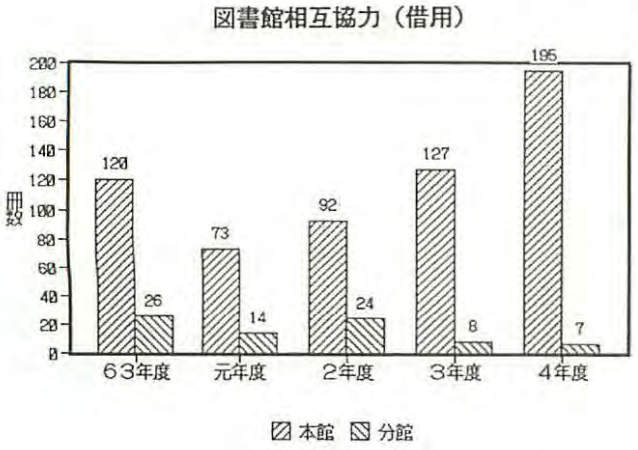


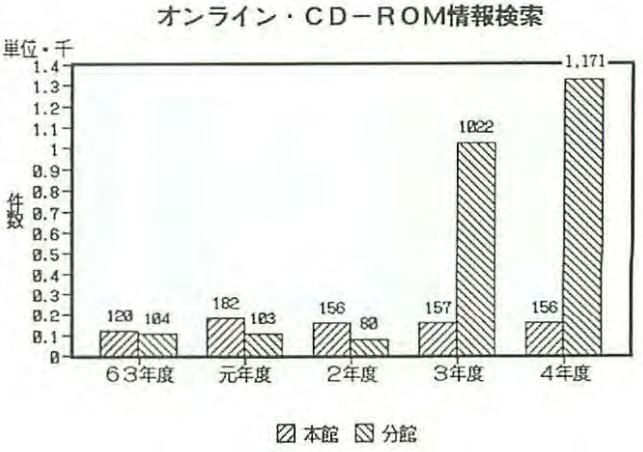

貸出図書冊数
単位・千
冊数
9,227
9,837
9,343
5,871
5,944
35,313
38,292
38,599
42,983
45,584
63年度
元年度
2年度
3年度
4年度
本館
分館

図書館相互協力（文献複写：依頼）
単位・千
件数
2,938
1,503
3,051
1,507
3,068
1,398
5,290
1,421
4,730
1,449
63年度
元年度
2年度
3年度
4年度
本館
分館


図書館相互協力（文献複写：受付）
単位・千
件数
946
2,784
1,603
2,901
1,667
2,890
1,910
2,976
2,507
3,419
63年度
元年度
2年度
3年度
4年度
本館
分館


図書館相互協力（貸出）
冊数
13
1
19
1
7
0
8
0
21
6
63年度
元年度
2年度
3年度
4年度
本館
分館


図書館相互協力（借用）
冊数
120
26
73
14
92
24
127
8
195
7
63年度
元年度
2年度
3年度
4年度
本館
分館


オンライン・CD－ROM情報検索
単位・千
件数
120
104
182
103
156
80
157
1022
156
1,171
63年度
元年度
2年度
3年度
4年度
本館
分館

平成４年度基本図書購入リスト

資料選定委員会によって選定された下記資料を購入しました。なお，
これらの資料は分類別に備え付けておりますのでご利用ください。

Nineteenth century short title catalogue, 1816-1870 vols.14－21	本館
論争・学説日本の考古学　全６巻別巻１	本館
明治文化全集　全28巻別巻１	本館
海外視点日本の歴史　全15巻	本館
芦田恵之助国語教育全集　全25巻	本館
Comprehensive organic synthesis,9vols.	本館
人工知能の基礎知識（ビデオ）	本館
Springer series in synergetics, no. 1 －54	本館
人体組織学　全８巻	本館
ナーシングマニュアル　全21巻	分館
A New dictionary of the English language.	本館

教官寄贈図書（平成４年度）　　本館所蔵分

ここには学内の教官が著作・編集・刊行等に関係した図書で，図書館に寄贈された分を掲載しています。御寄贈ありがとうございます。引続き御寄贈をお願いいたします。

柘植　治人（農学部）
　からだに役立つ水溶性ビタミン　雪印乳業株式会社健康生活研究所編　雪印乳業株式会社健康生活研究所　1992

小林　靖昌（教育学部）
　ヘーゲルの人倫思想　小林靖昌著　以文社　1992

鈴木　義孝（農学部）
　ニホンカモシカの解剖図説　杉村誠，鈴木義孝著　北海道大学図書刊行会　1992

武藤　高義
　アクチュエータの駆動と制御　武藤高義著　コロナ社　1992

平成５年度附属図書館関係委員会委員

	附属図書館委員会委員	資料選定委員会委員	館報編集委員会委員	図書・紀要編集委員会委員（医学部分館）
館長	梶山雅史	梶山雅史	梶山雅史	
医学部分館長	岡　伸光	岡　伸光		岡　伸光
教育学部	御宿正司	御宿正司		高見　剛
〃	利部伸三			廣瀬　一
医学部	片桐義博	片桐義博		片桐義博
〃	森　秀弘			坂野　毛子
工学部	小鹿丈夫	小鹿丈夫		吉見直己
〃	岸田邦治			森　秀弘
農学部	百町満朗	松本康夫	百町満朗	太田宗一郎
〃	松本康夫			齊尾征直
教養部	荻　信隆	洞澤　伸	荻　信隆	松浦一也
〃	洞澤　伸			丹羽憲司
医療技術短期大学部	山崎捨夫	山崎捨夫	山崎捨夫	若園明彦
工業短期大学部	永田　拓	永田　拓	永田　拓	
		溝口敏博	溝口敏博	
		森　一雄	中齋二三博	
		小林かず子	村上喜廣	
		羽賀啓子		

人　事　異　動　平成５年１月～４月（　）内は旧

（昇任）

４．１　内海　春代　整理第一係受入主任
　　上口　正昭　整理第二係目録情報主任
　　山田　洋子　参考調査係参考調査主任

（配置換）

４．１　長屋　倫明　教育学部学務係（整理第一係）

４．１　山田　克良　医学部分館図書主任
　　宮崎　直昭　〃　情報処理主任

４．１　大野純嗣　整理第一係（医学部医事課）

図書館員から一言

森　一雄

図書館界において，酸性紙を使用した図書館資料の劣化に対する問題が論じられ，ほとんど対策がなされていなかった本学図書館においても，早急に対応する必要性に迫られております。劣化資料の選別，中性紙の保存箱の活用，マイクロフイシュ化等々課題は山積みであります。一方，情報処理の電算化，CD－ROM等の電子出版物による情報提供等電子図書館化の時代に突入しました。LANを活用してのCDサーバによる検索提供も早急の課題です。いずれにしても経費のかかる問題。学内のご理解とご協力をお願いします。（もり　かずお：専門員兼図書係長）

村上喜廣

学術情報センターの図書館ネットワークに次々と各大学図書館等が参加し，目録・所在情報サービス，情報検索，ILL（相互貸借）システムが利用されています。特にILLシステムの稼働により，国公私立の館種を問わず全国レベルで資料の利用が行われ，図書の借用や文献複写物の入手が迅速・的確になり利用者の要求に応えることができるようになりました。本学も参加館の一員として迅速・的確に資料提供できるようにするために，日頃から資料を大切に扱い，一層の蔵書整備が必要です。皆様方のご協力をお願いします。（むらかみ　きひろ：参考調査係長）

お　知　ら　せ

・ビデオソフトのご案内

ビデオ「人工知能の基礎知識」が入荷しました。ビデオの利用は図書館内に限定されますが，授業で使用される場合に限り，館外貸出をしています（事前に手続きが必要です）。

閲覧係又は医学部分館で利用申込みを受付けています。

・ＣＤプレーヤの設置について

本館の視聴覚コーナーにＣＤプレーヤを設置しました。利用される場合は，閲覧係に申込みください。

休館日のご案内　平成６年１月上旬まで

次のように**休館日**を予定しています。

- 毎月第二火曜日
- 夏季休業中の図書整理期間
  附属図書館　８月２日(月)～８月９日(月)
  医学部分館　８月11日(水)～８月13日(金)
- 12月27日(月)～１月５日(水)
- 夏季及び冬季休業期間中の次の土曜日
  ７月17日，７月24日，７月31日，
  ８月７日，８月14日，８月21日，
  12月25日，１月８日

次のように**夜間開館停止**を予定しています。

- 附属図書館　７月19日(月)～８月24日(火)
  １月６日(木)～１月10日(月)
- 医学部分館　８月９日(月)～８月13日(金)
  １月６日(木)～１月10日(金)

＊図書館の案内・掲示に注意してください。

岐阜大学附属図書館報「寸胴」第10号　1993年６月30日

編　集　委員長：梶山雅史　委員：百町満朗，荻　信隆，山崎捨夫，永田　拓，溝口敏博，中齋二三博，村上喜廣

発　行　岐阜大学附属図書館

〒501－11 岐阜市柳戸１番１　☎0582－30－1111